

柳田国男における言語と感覚

深澤 進

1. 感覚と言葉

昭和十五年に『民間伝承』に掲載された「感覚の記録」において柳田国男は、感覚と言葉の関係について次のようにいっている：

感覚と言葉と、この二つの大切なものゝ間には、歳月に伴ふ僅かづゝのずれがあつて、永古に不変なる例は却つて少ないといふことは、曾てメイエ氏の細かな研究もあるが、日本などでは種族の混乱が無く、両者とも元の姿を保つものが多いので、殊にこの点を考察するのに都合がよい。言葉も感覚も、ものは手付かずに残つて居て、しかもその関係が移り動いて居るといふことは、古書によって昔を知らうとする者をまごつかせる難はあるが、それと同時にその移動の跡を辿ることによつて、今は別々と見られて居る幾つかの大きな感覚の、隠れたる連鎖を見出すといふ興味は深いのである。民間伝承の会の新しい針路として、次にはこの方面に進み入るのが順序のやうに思ふ。

(全集 30 P326)

柳田は感覚と言葉にずれがあるという。このずれによつて柳田が見出そうとしているものは何か。感覚と言葉の間は時間が経過するとともにずれを生じるという際のずれとは何か。柳田の説明では、このずれは「種族の混乱」によつて生じているものではない。時間が経過するとともに起こりうる民族の移動変遷によつて生じるずれのことを柳田はいつているのではない。柳田が主張しているのは仮に「種族の混乱」がない環境であつたとしても、感覚と言葉はずれるということである。そしてこのずれは、「古書によつて昔を知らうとする者」にとってはやっかいなものであるが、感覚と言葉の関係が移り動くことは、現在別々と思われているいくつかの「大きな感覚」同士が実はつながっていたことを示すことにつながるものなのではないかと、柳田は期待しているのである。だが、大きな感覚が

ひそかに連鎖しているというここでの柳田の主張は、この段階では新しい針路として提示されているもので、具体的に検証されているわけではない。

千葉徳爾は「感覚の記録」のこの部分に以下のような解説を与えている：

人の感覚（ここではものごとに対する感じかたで、いわゆる五感ではない）、ひろく心持を形づくるものとしてのそれは、表現手段として言葉を用いる。ところが感覚はその起こる場によって微妙な違いをもち、その場は狭い日常空間の中でさまざまに変化する。他方で言葉がある感覚を表現するものとして社会に定まった意味を獲得するまでには、共通理解の形成までにある時間が経過する必要がある。この狭い空間に成立する感覚と、長期にわたって安定した意味を保つ言葉との間には、当然ながら多少の対応上のずれがある。一般には時代が古くなるほどずれが大きくなりがちである。柳田以後の学徒はこの差の大きいことによって、この方法をあまり信頼しなかった。しかし、柳田は全国的な方言の対比とその使用される場合の異同とによって、ある程度まで感覚と言葉の対応性を復原し得た場合が多い。それには一つには、柳田のすぐれた言語感覚によるところがあった。（千葉 1991 P234）

このように千葉は柳田のいう感覚と言葉のずれを、感覚の発生する場と言葉が発生する場の違いによって説明している。感覚の生じる場は狭い日常空間である。それに対して言葉は、社会に定まった意味を獲得するまでに共通理解を形成する時間の経過を必要とする。感覚は小さな空間で流動的に発生し、言葉はそれよりも大きな社会空間で時間をかけて形成されるということであり、したがって両者にはずれが生じる。

だが千葉によるこのまとめは、柳田の主張している「大きな感覚」とは何かを説明するものではない。千葉のいう「狭い日常空間」にある感覚という構図に、「幾つかの大きな感覚の、隠れたる連鎖を見出す」という柳田の見立ては収まっていない。「柳田は全国的な方言の対比とその使用される場合の異同とによって、ある程度まで感覚と言葉の対応性を復原し得た場合が多い」という千葉の評価は、『蝸牛考』をはじめとする柳田の一連の方言をめぐる論考が感覚と言葉の元の関係性を明らかにしたと千葉が主張しているように読めるが、柳田が「大きな感覚」といつていることと、千葉のいう狭い日常空間で生じる感覚とは、別のものであ

るように見える。

では、柳田のいう感覚とは一体何であろうか。

2. 柳田国男における感覚

柳田国男が感覚にせまろうとしていたということを取り上げる議論はそれなりに多い。例えば柄谷行人はかつて柳田について、次のように主張したことがある。

柳田の初期の一連の研究、『蝸牛考』、『桃太郎の誕生』、『地名の研究』が共通しているのは、それらがもっぱら言葉を問題にしていることだ。「横断面」をみるといっても、彼は各地の習俗その他の外的な側面を比較するのではなく、ただ言葉の比較をとおして、その深層にある“内の感覚”に降りて行こうとしている。だからこういってもよい。宣長がそうであったように、柳田の民俗学はあくまで言葉の探求でありそれ以外のものではない、と。柳田の実践的な課題が「国語教育」に集約される所以もそこにある。(柄谷 1974→2013 P104)

柄谷は、柳田にとっての言葉とは表層ではなく、深層にある“内の感覚”につながるものであると述べているが、その根拠はどこに求められるのだろうか。「柳田の民俗学は言葉の探求でありそれ以外のものではない」という柄谷の見立ては正当なものなのであろうか。

この主張の根拠として柄谷が挙げる例は、標準語と方言の問題である。柄谷は、柳田が「標準語を非難し、方言に固有の微細な感覚に関する語彙にとぼしいことを指摘している」(柄谷 1974→2013 P104) とし、「(方言が標準語に) 翻訳可能なのは“表相”の意味だけであって、その言葉を真に理解するということは、その言葉でしかいいあわすことのできない、“経験”を所有することにほかならない」(柄谷 1974→2013 P105) と主張する。

実際には柳田は標準語を非難していたばかりでなく、あるべき標準語を模索していたことは周知の事実である⁽¹⁾。柳田が非難していたのは標準語の現状であって、標準語そのものについては「いつかはこの愛する国土の上に、出現させようといふ我々の決意は固い」(全集 18 P387) という立場であった。柄谷の切り取

り方では柳田がただ標準語を否定し方言を肯定したと、話が単純化されてしまうことは否めない。

だが、その問題以上にここで考えてみたいのは、柳田が指摘していると柄谷がいう「方言に固有の微細な感覚」とは何であるのかということだ。

柄谷は何を根拠にこう主張しているのか。柄谷は、柳田が言葉を「人間のもっと内的な深い領域、ベルグソンがイマージュとよんだものの側から」（柄谷 1974→2013 P104）とらえていたという。この内的な深い領域について、柄谷は森有正が滞仏二十年ののちに「ヨーロッパという異質の文化圏の内側に入りこみ、何か不透明な「厚い層」を通りぬけてその「内的な感覚」に到達したという経験」（柄谷 1974→2013 P106）や、人類学者のフィールドワークを例に説明しているのだが、柳田のテキストにも当然依拠している。柄谷が直接触れているのは柳田の『国語の将来』に収められている「国語教育への期待」である。柄谷は「柳田がやろうとしたのは、各地の言葉（昔話・伝説）のひだを一つ一つかきわけながら、その“内的な感覚”に到ろうとすることであって、いいかえれば言葉以前の言葉、あるいは経験に遡行することであった」（柄谷 1974→2013 P108）とし、「国語教育への期待」の以下の部分を引用する。

土語即ち母の語で物を考へるといふことは、必ずしもそれが早く自然に習得したもので、他の一方は時おくれて外から注入したものだという理由だけではないやうである。学校の言葉には制限があり、又統一の為の選定がある。仮にその全部を遺憾なく消化しても、土地土地の実際の必要を皆覆ふだけの余裕は無い。常民の思慮感情は決してそう自由奔放のものではないのだが、是を導くのは各人の環境と、至って平凡なる昔からの実験である故に、たとへば価値のある新しい材料を授けられたからと言つて、ふだんはさういふ事ばかりを念頭に置いては居ない。如何に国語の教員が干渉を試みても、腹で思ふことは勝手にそれには別の語が無いから、依然として入学前から知つて居る語を使用して、考へたいことを考へ、感ずるまゝに感じて居るのである。それが偶々外部へ表白せられる場合、一応翻訳見たやうな手続を要するか否かによつて、借りた言葉か自分の言葉かゞ決するのである。（全集 10 PP188-9）

柄谷は、この部分を根拠に柳田が“内的な感覚”に到ろうとしたと主張している。では柄谷は“内的な感覚”をどのようなものであると主張しているのだろうか。柄谷は、この引用の直後に、柳田がこの部分の次の節でいっている「人が心の中で使ひつゞけて居る日本語」（全集10 P189）が、「これは事物でも概念でもなく、しかもその源泉にあるような“内的な感覚”を意味しており、それはけっして外に表白されることがないのである。」（柄谷1974→2013 P109）と主張している。

たしかに、ここにおいて柳田はある種の感覚を問題にしているように読める。しかしそれが「事物でも概念でもなく、しかもその源泉にあるようなもの」である根拠は明確とはいえない。

そもそも柄谷の引用した部分を、柳田はどのような文脈でいていたのだろうか。

「國語教育への期待」は、昭和十年の初等國語教育研究会における講演をもとにしたものである⁽²⁾。この引用に至る部分で、柳田は「個々の民族に賦与せられた國語の用法」（全集10 P188）には、「後々の発明」（全集10 P188）である「書く」と「読む」があり、「元からあつたもの」として「言う」と「聴く」の他に「考へる」ということがあって、「それが最も重要である」と主張し、そのことに「心づかない人はよもや有るまい」と思われるのに、「其割には是の当不当と能率の大小を注意して居る者が、教育者にも少ないやうに見える」（全集10 P188）と指摘している。この「考へる」ということが、「第一に外部に現はれない故に、どんな言葉が用ゐられて居るかもまだ明かでない」（全集10 P188）と柳田は断言を避けた上で、「私はそれは皆所謂土地の言葉で、学校で授けたものなどは至って徐々に、且つ迂路を通つてしか其中に入つて行かぬやうに感じて居る。実験の出来ることらしいから追々此点確かめて見たい」（全集10 P188）とする。柄谷が引用したのはこのあとに来る部分である。

ここで問題になっているのは柄谷のいう“内的な感覚”なのであろうか。たしかに柳田は國語の用法として、元からあつたもののことを問題にしている。柄谷のいう“内的な感覚”は、この元からあつたものに属するだろう。だが、柳田がここで強調している、そのうちの「考へる」は柄谷のいう“内的な感覚”といえ

るのだろうか。仮に“内的な感覚”であるとして、それが「これは事物でも概念でもなく、しかもその源泉にあるような“内的な感覚”を意味しており、それはけっして外に表白されることがない」（柄谷 1974→2013 P109）ということにはならない。

また、柄谷が“内的な感覚”であると主張した柳田の「人が心の中で使ひつゞけて居る日本語」（全集 10 P189）はどのようなものであろうか。柳田はこのあり方を中心に詳細に説明している。柳田はこの日本語が「分量に於ても最も大きく、又一ぱん大切な仕事をして居る」（全集 10 P189）と位置づけ、そこから「何ぞの時には自然に文字となり又は口から迸り出て、それぞれの交通に役立つ」（全集 10 P189）ものとする。ただ、この日本語を人は十全に使いこなしているかといえば、そうではないと柳田は考える。この日本語は「如何によく稼ぐ文筆業者でも、立板に水といふ類の演説家にしても、実際はその片端しか物にはして居ない」（全集 10 P189）という。このことを柳田は一般的な問題として説明を続ける：

ましてや只の人には聴けばわかるというふのみで、自分は一生の間に算へるほども言つて見たことは無いといふ、単語なり句法なりは幾らあるか知れない。女などは普通寸刻も休まずに、朝起るときから夜睡りつくまで、引切りなく何か考へごとをして居るのだが、よくよくで無ければそれを口にせず、又彼等にはどうしても言へない言葉が多い。以前は結構それで用が足りたのである。村には第一共同の思惟があり、又予期され得る共同の感覚が今でもある。大抵の場合には目を見合わす迄も無くそれが察せられ、たまたま二つ三つに岐れることがあつても、たつた一言で心持はずでに判る。主格客格の完備した文法通りの長文句を吐くことは、必要でないのみか寧ろ異様であり且つ適切でなかつた。（全集 10 PP189-190）

ここで柳田がいつていることは「人が心の中で使ひつゞけて居る日本語」（全集 10 P189）を、「事物でも概念でもなく、しかもその源泉にあるような“内的な感覚”を意味しており、それはけっして外に表白されることがない」（柄谷 1974→2013 P109）とした柄谷の解釈の通りであるようにもみえる。「村には第一共同の思惟があり、又予期され得る共同の感覚が今でもある。大抵の場合には

目を見合わす迄も無くそれが察せられ、たまたま二つ三つに岐れることがあつても、たつた一言で心持はすでに判る」というのはまさに柄谷のいつている“内的な感覚”であるようにも取れる。

だが、それが柄谷のいうように「けっして外に表白されることがない」性質のものであるかどうかは疑わしい。なぜなら柳田はそれが表白されているように見える例を直後に二つほど挙げているのである。

以前神戸に桜井一久氏という名弁護士があつて、曾て俄雨の中をずぶ濡れになつて緩歩して居た。どうして走らぬかと人が謂つたときに、「さきも降つとる」と答へたといふのが、逸話となつて今も記憶されて居る。都会だからこそ我々は珍とするが、田舎では毎日のやうにさういふ会話が聴かれるのである。相州の或海岸に私の家の松林が少しある。そこへ松葉を掻きに入つて来て困るので、或時留守番が出て制止すると、中年の女が出て行く棄てぜりふに、「なまぢゃ食へないや」と謂つたと聴いて私は感心した。それで十分に気持はわかるのだが、是を綴方流に精確にいふと、今まで私たちは此辺の松の葉を拾つて煮たきをして居た。それを囲ひ込まれたからと言つて燃料を断念するわけには行かぬ。人はなまものを食つて生活し得るもので無いからといふことを、理窟はともかくもこの短文の中に、明瞭に綴り込んだ技能は驚くべき練習と言はなければならぬ。(全集 10 P190)

この二つは村の「共同の思惟」や「予期され得る共同の感覚」を具体的に示した例である。ここにおいてたしかに柳田は感覚という言葉も用いながら、柄谷の主張するような議論を展開しているようにも読める。「さきも降つとる」、「なまぢゃ食へないや」は、そこに根ざして生きている者が持っている感覚を通してはじめて理解できる、そういうものとして柳田はこれらの例を出しているのはたしかである。だが、この感覚は柄谷が主張するように「けっして外に表白されることがない」のではなく、むしろ「短文の中に、明瞭に綴り込」まれているのである。この点で少なくとも柳田のいう感覚と柄谷のいう感覚は異なる。

さらに、柳田は感覚の存在を示唆することで終わりにしていない。柳田はこの二例を挙げた後に、感覚が通用しない問題を指摘しているのである。

ところが其様な略文や感動詞だけで、通用せぬ交通といふものが新たに始まつて来たのである。相手には二とほりあつて事実呑込み得ない者と、わかつても同情が足らず又は意地が悪くて、言葉咎めや揚足取りをする者とがある。どちらかは知らぬが兎も角も他郷人、気心の知れない初対面の人などには、改まつて形式的に諄々と説く者を、選抜して出す必要が生ずるのである。私がよそ行きの話し方といふのも此部分に該当する。村にはさういふ人を多分にこしらへて置くに及ばなかつた。元は口きゝと称して仲間でも大事にされることは、医者や手習師匠と同格、時としては其以上に勢威を揮ふこともあつた。勿論年と共に其数は増して行くだらうが、今でも是に任せて黙つて居らうとする者は尚多く、一方口きゝの数が少しでも必要を越すと、剩つた力を内に向けるので物議は絶えない、即ち左様な明確に過ぎたる話し方の、郷党には無用だつた証拠である。(全集 10 P190)

このように柳田は感覚が通用しないことを交通の問題として指摘する。「他郷人、気心の知れない初対面の人」を相手にしなければならぬ状況。その場合は村には「口きゝ」が用意されていて、重宝されていた。だが、この対処法では済まない世界を柳田は想定する。それが「都会」、あるいは「都市」である。続けて柳田はいう：

是に反して都会はもともと他郷人の集まりで、殊に近頃では事実上気持ちの全く通じない、略語の不可能な者が相隣して住んで居る。辞令の練磨はその必然の結果であり、外部へ表示せられる言葉の割合は多く、従うて又刺戟によつて頻繁に変化して行くことを免れない。是が国語の都会に先ず発達し、新たなる文芸を支持して、地方に君臨するに至つた起源であつて、耳眼の感覚に雋鋭なる日本人が、甘んじて是を標準と仰いで、其よそ行きの話し方を改良しようとしたゞけで無く、徐ろに且つ間接には毎日の言葉、即ち感じたり考へたりする用途にも取入れたのは不思議なことでない。問題は畢竟するに其手順で、是を昔の国語教育のやうに、一旦自分のものにしてしまつてから、内で自発的に使はせるか、はた又現今普通に行はれて居るやうに、兎に角先ず改まつた話し方だけを統一して、其他は自然の成り行きに一任しようとするかである。郷土に即した教育といふ語は折々耳にするが、それだけで

は少し空漠の嫌ひがある。私の解説では、個々の教へられる者の入用の最も多い部分、即ち国語でいふならば仲間と共に生き親しみ、且つ内で思つたり感じたりする時の用途に、もう少し重点を置いてもらひたいことで、是でおのづから都市と村落との教へ方をかへる必要が認められて来るかと思ふ。(全集10 PP190-1)

ここにおいてわかるのは、感覚が通用しないことを都市の問題であると柳田が位置づけているとともに、都市と農村が相容れないものであるとは考えられていないということである。他郷人の集まりである都市は、「さきも降つとる」や「なまぢゃ食へないや」は通用しない。しかしそのことは、柳田のいう「都会」が「地方」の対立物、あるいは「都市」が「村落」の全くの対立物であることを意味しているわけではない。都会で発達した言葉は、地方に君臨する。それに地方は甘んじてはいるのだが、「其よそ行きの話し方を改良しようとしたゞけで無く、徐ろに且つ間接には毎日の言葉、即ち感じたり考へたりする用途にも取入れた」のである。「耳眼の感覚に雋鋭」だからこそ、地方は都会の言葉を取り入れているというのが柳田の主張である。

感覚が通用する農村とそれが通用しない都市。その対立の構図は柳田の中にまぎれもなく存在している。だが、都市と農村は全くの対立物なのではなくて、都市の言葉は農村の「感じたり考へたりする用途」に取り入れられていると柳田は認識しており、「問題は畢竟するに其手順」と、論点を手順の問題にしている。その手順を柳田は昔のものと同今のものとの一つずつ提示をしているわけだが、その「一旦自分のものにしてしまつてから、内で自発的に使はせる」という昔の国語教育の手順と、「兎に角先ず改まつた話し方だけを統一して、其他は自然の成り行きに一任しようとする」現今の手順いずれもが、農村が都市の言葉を受け入るものである。

この時、問題となるのは何であろうか。柳田はかなり具体的な解答として、「個々の教へられる者の入用の最も多い部分、即ち国語でいふならば仲間と共に生き親しみ、且つ内で思つたり感じたりする時の用途に、もう少し重点を置いてもらひたい」と主張しているわけだが、その主張から「おのづから」都市と村落の教え方をかえるということになってくるのはなぜか。

そのことを説明していると思われるのが、柳田がこの主張の次節で論じる日本語における都市と村落（この節の柳田の表現では「田舎」）の位置付けである。

まず、柳田は「最近百年か百五十年間の、日本語の目ざましい発達は、主として都市の力に負うて居ること、それが国民一般の智能を推進める上に、どの位大きな働きをしたか知れぬといふことは、誰よりも先きに讃歎する者が私である」（全集 10 P191）と、日本語の発達に都市が果たしている役割を肯定的に評価する。その理由は、新語が都市で作られるからである。

日本人が仮に兼てから思慮の緻密、感覚の繊細さを以て誇り得る民族であろうとも、言葉の是に配当せられるものが無かつたならば、発して外に表示することが出来ぬは勿論、自分でもたゞ懊悩して適当に之を処理することを得なかつたらう。さういふ言葉が近世は非常に増加したのみならず、前からあつたものも大抵は皆変わつて来て居る。さうして田舎の手作りでなかつた証拠には、一部は知つて用ゐる他の者はまだよくわからぬといふ言葉が、形容詞や無形名詞の中には特に多いのである。斯ういふ新語が都市から持つて来られるたびに、田舎の観方と感じ方の、新たに生まれぬまでも鮮明になり、又的確になつたことだけは争へない。しかも寂しい人たちの内部生活は、もう少し多彩であつてもよい。我々が今一段と哲学風に考へ、又は所謂分析的に批判し得る様になる為には、斯う書きつゝも親の言葉のまだまだ足りなかつたことを感ずるばかりである。輸入超過は今後も続いてくれなくては困ると思ふ。（全集 10 P191）

新たな交通が開け、都市が発達し感覚が通用しなくなった問題を柳田がただ嘆いていたわけではないことは明らかである。都市から言葉が入って来たために、村落は感覚を表現する手段を得たと、柳田は都市が感覚に言葉を与える役割を積極的に評価する。都市からもたらされる新語が、村落の観方と感じ方を鮮明にし、的確にする。柳田の想定している感覚は、都市によってただ破壊される類のものではないことは確かである。

しかしそのような都市肯定がありながら、村落での国語教育を都市と変えなければならぬのはなぜであろうか。柳田は続けて次のように主張する：

但し必要なる条件としては、それが各自の実際に入用なもの、自分で体得して生存の一部に同化するものでなくてはならぬ。単なる外形の模倣では是は口利きの養成にしかならない。いつかは廻り巡って日常の用語に採られもしようが、それには待遠い時間を要し、又今日のやうな教育組織では、笑はれ咎められもせず、多くの片言を成長せしめる結果を見るであろう。此点が私には甚だ心もとないのである。(全集 10 PP191-2)

この柳田の懸念が、都市と村落での国語教育を変えるという主張の根拠となっていると思われる。都市の言葉は都市に合うようにできており、その言葉をそのまま村落に持ち込んでも「単なる外形の模倣」になってしまう。柳田が理想としているのは、輸入される都市の言語が「自分で体得して生存の一部に同化するもの」として農村に受容されることである。

このような受容を柳田はどの程度現実的に考えていたのであろうか。柳田は続けて「活きた言葉といふのは少し強過ぎるか知らぬが、とにかく内に根のある語、心で使つて居るのが其まゝ音になつたのを、心の外でも使ひ得るやうに是非させたい」(全集 10 P192) と主張するのだが、柳田の認識する現状は、それに失敗した片言の状態が多く見られている。柳田はそれが「人に心にも無いことを喋り散らさせるやうにした」(全集 10 P197) 国語教育の責任で生じていると難じている。その上で柳田は「次の代の国民に、出来る限り片言をいはずにすること、是を私などは国語教育の一ばん重要なる役目と心得て居る」(全集 10 P197) と、国語教育のあるべき姿を提示しようとする。

この点について、田中克彦は論文「柳田国男と言語学」において、柳田のあり方を次のように指摘する：

非生活語であるところの標準語のために、黙りこまされた生活者の言語を解放し、最も多く発言すべきかれらに自由にものを言わせようとするならば、単にかれらの言語そのものを考察の下に置くだけでなく、そもそも言語はいかなる様式をとって表現に至るかというところまで観察の領域を拡げなければならなかった。(田中 1975→1991 P90)

この「そもそも言語はいかなる様式をとって表現に至るか」という問題は、柄谷であるならば、「事物でも概念でもなく、しかもその源泉にあるような“内的

な感覚”を意味しており、それはけっして外に表白されることがない」（柄谷 1974→2013 P109）ものということになる。

田中の場合はどうか。田中は柳田が観察した様式を、『国語の将来』における「ハナシ」の議論を取り上げて説明する。田中の説明は次のようなものである。明治以降の近代化の過程において、演説という新たなジャンルが生まれたが、柳田はそれに日本人の言語利用の根底的変化を見ている。「話し手から一方的に聞かせる、定式をそなえたスタイルはかつては『物語』として存在したが、それからハナシへの変化には距離がある」（田中 1975→1991 P90）と柳田は考えている。ハナシという日本語は中世の新語であって、「そのため、現代の東北地方にハナスという語がなく、カタル、シャベル、であり、関西ではイフが、あるいは名詞から派生させたハナシヲスルという形しかないという。柳田によればこのハナシの出現こそは、言語の時間単位の表現量を増やし、加速する原動力となった」（田中 1975→1991 PP90-1）。

田中のこの説明は、「ハナシ」という様式こそが言語を表現に至らしめたと指摘するものである。ただしこの様式は、言語の使い手にとって十全なものであるわけではない。田中は『国語の将来』における柳田の「ハナシ」について位置付ける、「此単語（＝ハナシ）が表示して居る一種の国語利用の方式も、都市を中心として徐々に発達して来たもので、上代は勿論のこと、田舎では久しい後まで之を知らずに居たのである」（全集 10 P38）という指摘や、「少しの生活史も持たない文章だけの日本語」（全集 10 P206）という文言を引用しつつ、柳田の視角を、「少しの生活史も持たない文章だけの日本語とひきかえに、生活語の全面的すげかえの代償を払ってはじめて公的言語生活に加わることできた不器用な常民のことばへのいつくしみ」（田中 1975→1991 P91）があるものとして評価する。

だが、この田中の柳田評は、本稿がこれまで検討してきた柳田の主張を単純化しているきらいもある。常民のことばは果たして生活語の全面的なすげかえによって成り立っているものといえるのだろうか。たしかに柳田が問題にしている片言を、不器用な常民のことばと言い換えていると理解することは可能である。しかしながら、田中のいう常民は田中自身が柳田のハナシの議論を取り上げている文脈からすると都市と田舎のうちの田舎の側ということになるが、これまで見

てきたように柳田の議論では、都市の新語が田舎の観方と感じ方を鮮明にしたということが認められている。都市からの新語の輸入超過を望んでいる柳田と、それを「生活語の全面的すげかえの代償」と評価する田中とは、否定し難い距離がある。

田中が引用する柳田の「少しの生活史も持たない文章だけの日本語」という文言は、柳田が「擬古文学禍」（全集 10 P205）と呼んでいる、国語の教育が深く考えることなしに古文を崇拜している問題が指摘されている文脈で出てきているものである：

語句語法の誤謬さへ指摘されなければ、即ち外から見た形さへ整つて居れば、
現在当人は感じて居ないことをたゞ並べても、結構ですと言はれた文学が、
日本では余りに永い間流行り過ぎて居る。（全集 10 P205）

柳田は文章語が感じていないことを表現するような使われ方をしていることを批判している。文章語を過度に重視する国語教育の結果として、田舎に片言が増幅することも危惧している。だが、この文章語批判の問題から、田舎（あるいは田中の言い換えている常民⁽³⁾）は公的言語生活に参加するために生活語を全面的にすげかえたとまとめてしまえば、田中自身が柳田から抽出したハナシの出現による言語の表現量の増加や加速の問題、そして柳田が考えていた新語の供給源としての都市の問題は置き去りになる。田舎の感覚を田舎自身の語彙で、そのまま表現するというのが柳田の理想なのではない。田舎の感覚を鮮明にするために、都市が必要なのである。ハナシが出現しているのが都市である以上、この都市というものこそが柳田にとっての言語とは何なのか、そしてさかんにいわれている感覚とは何なのかということを知る鍵となるのである。概念でも事物でもないという前に、柳田にとっての都市の問題を検討する必要がある。

3. 都市と農村

感覚と言葉ということで重要なのは、柳田が感覚が通用しない事態を根本的な問題と考え、それを都市と農村の問題と位置づけたことだ。実際柳田は著作『都市と農村』において、前節で取り上げた『国語の将来』と重なる議論をしてい

る⁽⁴⁾。具体的には『都市と農村』の第四章「町風田舎風」の中の七節目「語る人と黙する人と」を中心とする部分で、柳田は言葉についての検討を行っているのである。

そこで論じられていることが、『国語の将来』で指摘されている都市と農村との関係性と重なっている。柳田は「語る人と黙する人と」の直前の節、「京童の成長」において、京童について論じているのだが、この京童が村の人々の正反対のものとして位置づけられている。

若林幹夫がまとめるところによれば、京童は「そもそもは京都にいた無頼で口さがなく物見高い若者を意味する言葉だが、『都市と農村』ではそれを、落首のような表現により世相を批判する都市的心性として論じている」（若林 2014 P95）ということになるのだが、「語る人と黙する人と」が論じられる前段にその京童が論じられているのは、どういうことであろうか。

柳田は京童を、都市の構成員として「村から移つて来た武家町役御用方、人夫諸職人物売などの他に、別に未だ省みられざる重要な一分子」（全集4 P 232）として取り上げている。其の特徴を柳田は次のようにいう：

全体に気が軽く考が浅くて笑を好み、屢々様式の面白さに絆されて、問題の本質を疎略に取扱ふこと是一つ、群と新しいものゝ刺激に遭ふとよく昂奮し、しかも其機会は多く、且つ之を好んで追隨せんとしたが故に、往々異常心理を以て特殊の観察法を示唆せられたこと、是その二つである。次には何に使つてよいか、定まらぬ時間の多いこと、さうして何か動かすには居られぬやうな敏活さ、是が亦容易に他人の問題に心を取られ、人の考へ方を自分のものとする傾向を生ずる、それから隣以外の人に一時的の仲間を見付ける為に、絶えず技能を働かせ又之を改善せんと努めること、即ち大抵の童児には兼ねて具はつて、之をよく育成すれば公けの力となり、悪く延ばせば弥次馬の根性ともなるものを、特に境遇によつて多量に付与せられて居たのが京童であつた。（全集4 P233）

ここに続く部分で柳田が対比させているのが村の人である。

村に留まつていつ迄も耕作の業に携はる人々は、彼等とは正反対に、殆どそういう氣質を養ふべき機会を知らなかつたのである。だから世が静か得上に

対する怨嗟が無く、又は行詰つて社会の口承が杜絶し、所謂ゴシップの種が坊間に乏しくなると、その度毎に都市の落首式批判は去つて農村の最も無心なるものを襲はんとしたのである。権助田吾作の仮設笑話を以て文芸が都市人の退屈を慰めて居た期間も永かつた。(全集4 P 233)

都市の京童が世が静かで批判の対象を失うと、農村の人が退屈を慰めるターゲットとなること。その結果「是が手引をした経験で無い経験、それを唯些しく変形した程の農村概念が、現に今日でも或種の弁証には供せられんとして居る」(全集4 P 233) こととなる。都市に住む者が、いわばゆがんだ農村概念を流通させてしまうこと。柳田は「京童の成長」でこのことを指摘している。その議論に続けてあるのが「語る人と黙する人と」の節である。

この節で柳田は、前節「京童の成長」で取り上げた京童に象徴される都市と農村との対比をさらに検証する。

批評精神が旺盛な都市と、それと正反対に批評精神を養う機会がない農村との差異は、「果たして進歩の遅速と見ることが正しいかどうか」(全集4 P 234)と柳田は問う。この差異を論証するために、柳田は「言語の技術の、町が出来て後に急に目ざましい発達をしたこと」(全集4 P 234)を例に検討を行う。ここの柳田の論証は、『国語の将来』における議論と重なり合う。

村の無口が若し根本の不必要に基くとすれば、今までの雄弁の寧ろ疎まれて居たのも不思議では無いのみならず、くどい叙述を用ゐずして互の心持が解るだけの、村の交際が続いて行く限りは、輸出に向くやうな文章は将来も尚産しないかもしれぬ。町では境涯の異なる人がよく出逢ふ故に、上手な説明に軽口なども取り添へられ、若し仲間だけにしか通用せぬ省略をすると、楽屋落と称して人が嫌ふけれども、実はこの国の文学には、和歌俳諧の連句を首として、今でもまだ沢山の余韻がある。之を平明周到ならしめんとする運動は最近起つたが、しかもまだ知れ切つた綿密よりも、却て気の利いた不明瞭を、意味深長などと喜ぶ風はあるのである。ましてや久しい間「物言ひ」を不吉とし、単に相手が諒解を拒む場合のみ、此力を備つて居た土地に於て、眼や空気の直接の感応交通が、人を不調法にしなかつたならば、寧ろ物の不思議である。(全集4 PP234-5)

「眼や空気の直接の感応交通」で成り立つ農村の世界というものは、『国語の将来』においては前節で検討したように、村の共同の思惟や予期されうる共同の感覚として指摘されている。町では「仲間だけにしか通用せぬ省略」が楽屋落とされるという点も、「略文や感動詞だけで、通用せぬ交通」（全集 10 P190）と呼応している。

このように柳田にとって言語の問題の根底にあるのは、都市と農村の関係性なのである。農村は京童に代表されるような都市からの刺激を常に受けながらも、片言の問題を抱え続けているというのが柳田の問題認識である。

柳田は『都市と農村』においては、この点を、「村の表現の改良」（全集 4 P235）を妨げる 3 つの原因ということから議論を展開する。その 3 つとは：

- ①表現の形式の固定
- ②感情の波動が緩慢であること
- ③労働様式が定まっており、農村の境遇が意識されず、現状に甘んじるような状態であること

である。

①については、表現を聴く者に「至つて窮屈なる期待」（全集 4 P235）があつて、それが表現の自由度を奪っているということの意味していると思われる。これは、型通りの表現をすることへの期待があつたということであろうが、この点について柳田は「社交が広くなれば当然に其拘束は解けるであらう」（全集 4 P235）と、深刻にとらえていない。時が解決する問題だと柳田は考えているようである。

②は、都市が不断の刺激に満ちているのに対して、農村は祭礼等の年に何度かの行事の時以外は、感情の昂揚をのぞまない環境にあることを指している。このことを克服しようということが飲酒ということを促進したと柳田は説いているが、都市のような手軽な飲酒は定着しなかったという。感情が解放されない環境で何かを主張することにはたしかに困難であろう。

③は、農村の労働の形が古くから受け継がれたものを守ることによって成り立っていることを指している。それがなぜ表現を停滞させるのか。柳田はこのことを、鏡を持たぬ者が我が姿を表されるのを聴くような不安に例え、その不安を除くことにつながる学問や教育に対して農村は消極的であつたために、表現

するという行為が望まれなかったということである⁽⁵⁾。

これらの3点は、21世紀に入っている現在の農村においては、直接問題とはなっていないようなことと違ってよいかもかもしれない。そもそも柳田がこのことを問題にしていた20世紀前半から農業人口が激減していること一つをとっても、現代と同列に論じられるものではない。

だが、本稿が問題にしてきたのは、柳田の指摘した時代の農村と現代の農村の比較ではない。柳田国男にとって感覚とは何であって、言語と感覚はどのような関係にあるのかということまで見てきた。ここまでで明らかになったことは、それは柄谷行人のいうような「内的で決して表出しないもの」で説明しきれるものではなく、われわれを都市と農村という問題に導くようなものであった。新しい感覚の供給源ともいえる新語を生み出す都市は、村から移ってきた、いわば都市と農村を橋渡しする存在としての京童を出現させる。農村の側は感覚を表現する手段として都市の新語を取り入れようとするのだが、それはすんなりとはいかず、表現の失敗としての片言を生み出すことになるような壁が存在している。その壁である上記の3点が示しているのは、人間の感覚というものに①言語の型、②感情を制御する習俗、③労働という、人間の内部におさめることのできない力が関係しているということだ。柳田は感覚というものに社会性を見出したのである。

註

- (1) 深澤 2013
- (2) 『柳田国男全集』第十巻の解題、P532 による。
- (3) 常民はいうまでもなく柳田が使用している概念であるが、『国語の将来』のこの文脈で、柳田は常民とはしていない。
- (4) 『都市と農村』が昭和4年、「国語教育への期待」が昭和10年のものなので、『都市と農村』における議論の方が時期は早い。
- (5) 「町風田舎風」の章の「古風なる労働観」の節で柳田は、この状況において学校の教育は急激な解放となりすぎ、農村に不似合いな生活をする者のみが成功し、かえって農村の表現の停滞をきわだたせることになったことを指摘している。その一方で、この急激な解放のおかげで村々のかかえている問題点が明確になり、農村における労

働のあり方が見えるようになったことを柳田は評価している。

参考文献

千葉徳爾 1991 『柳田國男を読む』 東京堂出版

深澤進 2013 「柳田国男における標準語の問題」 『成城大学共通教育論集』 第6号 PP85-104

柄谷行人 1974→2013 『柳田国男論』 インスクリプト

田中克彦 1978→1991 「柳田国男と言語学」 『言語からみた民族と国家』 岩波書店 PP41-73

若林幹夫 2014 『都市論を学ぶための12冊』 弘文堂

柳田國男 1929 『都市と農村』 →1998 『柳田國男全集 第四卷』 筑摩書房 PP175-324

———1939 『国語の将来』 →1998 『柳田國男全集 第十卷』 筑摩書房 PP19-218

———1940 「感覚の記録」 →2003 『柳田國男全集 第三十卷』 筑摩書房 PP326-7

———1949 『標準語と方言』 →1999 『柳田國男全集 第十八卷』 筑摩書房 PP377-476